

道徳科授業での学びをどう捉えるか

上地 完治(琉球大学)

1. 道徳科授業における学びの焦点

(1) 行為なのか理由(考え方)なのか

○どうすべきか

○なぜそうすべきだと考えるのか

(2) 少年の方を選んだ二人の手品師

手品師A：少年を悲しませたくない。

手品師B：約束は守らなければならないから。

※二人の手品師は同じ意見だと言えるのか？

(3) 道徳的判断は具体的な場面(文脈)によって異なってくる

「遅刻はいけない」

(例1) A君が、学校に遅刻した。

(例2) B君が、学校に来る途中で倒れているお年寄りを見つけて救急車を呼んで、救急車が来るまで付き添ってあげたため、学校に遅刻した。

(例3) C君が、明け方までゲームをしていて朝起きれなかったので、学校に遅刻した。

※子どもたちが一緒に考えるためには、考える場面の統一が必要

(4) 教科書の役割

教材＝子どもたちが問題をみんなで考えるための共通のプラットフォーム(場面設定)

※道徳科では、教材を通して「何かを学ぶ」ことが重要(授業の目的)であって、教材を教えること(材料自体)が重要なわけではない

2. 子どもたちの考えが深まるプロセスをイメージする

(1) わかりきったことを教える？道徳授業

教科：わからないことを教える

道徳：常識的にわかっていることを扱う(内容項目は常識的)

※わかっていることは教えられない！

↑

教育とは、わからないこと(できないこと)がわかる(できる)ようにする営み

(2) 道徳科の内容項目は授業のねらいとはならない

「内容項目」＝道徳性を養うための手掛かりであって、授業のねらいではない！

○これらの内容項目は、児童自らが道徳性を養うための手掛かりとなるものである。
(『小学校解説 道徳編』p.21)

○それぞれの内容項目は指導に当たり取り扱う内容であって、目標とする姿を表すものではない。(『小学校解説 総則編』p.58)

※「手掛かり」である内容項目を授業の到達目標とするのはおかしい

※道徳科授業のねらいは内容項目の「向こう側」に設定しなければならない(上地)

(3) 「自分事」とは具体的に何を意味しているのか

①あなたはどうすべきだと思いますか？

②あなたならどうしますか？

※子どもたちは現実でも少年との約束を選ぶと本当に考えているのだろうか？

- ・手品師としての自分の夢 < 初めて会った少年との約束
- ・食べていくのもやっとの生活(この選択で得られなかったものを想像する)

(4) 問題に「自分事」として向き合う／考えを深める

・手品師Bへの発問：

「では、あなたはどのような場面でも先の約束を優先するのですね？」

中心発問 → 子どもの意見A ← ゆさぶりの発問

↓

子どもの意見B(深まる) ← ゆさぶりの発問

↓

子どもの意見C(さらに深まる)

※子どもの思考を深めるのは、中心発問ではなくゆさぶりの発問

(おまけ) 教材に描かれている道徳的問題の種類を理解しよう！

- ・教材「手品師」＝どちらを選択しても間違いではない(問題ではない)
- ・教材「雨のバスでいりゅう所で」＝よしさんの行動の問題点を理解する
＝正しさ(どうすべきか)が問われる問題